

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	岡嶋隆佑
主 論 文 題 名 :				
自由行為の哲学—初期ベルクソン哲学における時間と空間—				
(内容の要旨)				
<p>本論文は、アンリ・ベルクソンの最初の二つの著作である『意識の直接与件についての試論』（1889年、以下『試論』と略記）と『物質と記憶』（1896年）に対して、「自由行為」という観点からひとつの読み筋を与え、その過程で提示される時間と空間に関わる諸概念——知覚、記憶、再認、意識の諸平面、物質等——について一貫した理解を与えることを目的とするものである。</p> <p>具体的には、次の三点が本論文において提示される主な主張である。</p> <p>第一に、『試論』が自由行為を最も明白な事実として確認しているのに対して、『物質と記憶』は、そうした自由行為がいかにして可能であるのか、その諸条件を探求する著作である、という点。『試論』が自由の事実確認を結論としていることは著作に明示されているとおりである。また、その結論が、『物質と記憶』が副題に掲げている心身問題への対応を要請することになったという点については、著者自身が後に回顧的に述べていることから、研究者の間で一定の共通認識となっていると言って良い。しかし、より正確に言って、『物質と記憶』は、自由行為の事実という前著の結論をどのように継承しているのかという点については、未だ明確な検討がされていない状況にある。このことの主な要因として、いくつかの論点について、二つの著作間では一見したところ大きな相違が見られるという事実を指摘できる。本論文は、そうした相違が多くの場合について実際には見かけ上のものにすぎないことを示しつつ、『物質と記憶』を、『試論』で示された自由行為の可能性の条件を探求する著作として解釈するものである。</p> <p>こうした方針は、ジル・ドゥルーズの『ベルクソニスム』と明確に対立する。同書においてドゥルーズが、逆円錐図によって示される純粹記憶理論をその解釈の中心に据えつつ、それを存在論的に読み込み、『創造的進化』や『持続と同時性』も含めて一元論的なベルクソン像を提示したことは良く知られている。しかし、ベルクソン自身にとって記憶力とはまずもって行為に向けられたものであって、あの有名な図も、ひとまずは実践的な観点から読まれるべきものである。存在をとるか行為をとるかが、ドゥルーズとベルクソンを分かつ最大の対立点だということは、両者の哲学全体についてはすでに指摘されているが、『物質と記憶』に限って具体的にどのような対立があるのかという</p>				

ことを示すような研究は——潜在性概念といった個別のトピックを除けば——いまだ為されていない。自由行為という観点から初期ベルクソン哲学に一貫した読みを与える本論文は、全体としてドゥルーズ的な解釈へのアンチテーゼを成すものであり、とりわけ『物質と記憶』については、現在でも未だに支配的な彼の解釈とは全く違った側面がそこに潜在していることを示すことになる。

第二に、二著作間には、空間および時間に関して、ベルクソンの理解の深化が見られるという点。『試論』は我々人間の内的意識を主な考察対象としていたため、その観点から語られる自由行為は、外界と結びつきをもたず、いわば宙に浮いている状態であった。『物質と記憶』は実践的な観点から外的知覚の条件としての空間概念そのものを改変しつつ、そのことによって同時に、等質的時間および持続に新たな規定を与えるに至っている。だがそうした事情は、著作内部では明示的に述べられていないために、二つの著作には、一見したところ矛盾が含まれているように思われるのである。

こうした観点について本論文は、フレデリック・ヴォルムスの『ベルクソン、あるいは生の二つの意味＝方向』の方針と親和的である。それによれば、ベルクソンにとって生命の働きはそれ自体が実在である一方で、その実践的な性格のために実在の認識を歪曲する要因でもある。とはいえ、同書は、四つの主著の全てに対しこうした観点からひとつの読み筋を与えるという性質上、『試論』から『物質と記憶』へと正確に言ってどのような仕方でベルクソンの思索が発展したのかまでは示せていない。この観点からすれば本稿は、自由行為の事実確認とその可能性の条件の探求という仕方で両著作を接続することで、ヴォルムスが引いた解釈路線を継承・発展させる試みとして位置付けることができる。

第三に、以上二つの論点についての考察にとっての最も大きな枠組みとなっているのは、カント哲学であるという点。『試論』が時間、『物質と記憶』が空間という論点において、それぞれ自説を超越論的感性論と対比させていることはテキストに明示されていることだが、それ以外の様々な論点——物自体や自我、自由、図式、構想力等々——についても初期ベルクソン哲学は『第一批判』のフレームを継承していると言って良い。とりわけ、『物質と記憶』において、知覚や記憶力が「有用な行為」に向けられたものであることが繰り返し強調されるとき、それと対比される「純粋な認識」が、第一批判的な意味での「判断」のことを指していることを考えれば、上に述べた第一の論点は、一旦アプリアリな総合判断の成立を確認した上で、それがいかにして可能か、その諸条件を探求したカントの歩みと並行的なものと考えることができる。

カントとベルクソンを比較・対照する試みについては、バルテルミ・マドールの『カントの対抗者ベルクソン』や杉山直樹の『ベルクソン——聴診する経験論』を筆頭に、

すでに一定の研究の蓄積があると言って良い。とりわけ後者の諸解釈は、本稿も負うところが大きい。必ずしもベルクソンのテキストを網羅的に扱っているものではない。本稿で提示する空間および時間、そして多様体についての議論はその補完となるべく書かれている。

本論文第1章「自由行為の事実」では、『試論』から1894年の講義までをコーパスとして、ベルクソンが最初の著作で最も明白な事実として認めた自由行為の概念の内実の明確化を行う。『試論』は、まずもって遂行されつつある行為が呈する意識的な質のうち自由を求めるのだが、それは、行為が意識される際のその質のうちには、行為主体の自我が多かれ少なかれ表現されており、その表現の程度によって当該の行為がどれだけ自我自身によって決定されているかが規定されているからである。そうした意味での自由をベルクソンは、その後、『第一批判』で垣間見られた作用や能力としての自我と重ねつつ、それを（カントで言えば）現象界の側に引きおろすために必要なポイントをいくつか示唆している。感性の形式を習慣と、産出的構想力を記憶力と読み換えることができるならば、非感性的な直観の余地が開かれるのではないか、そしてそうすれば、『試論』では宙づりになっていた自由が物質世界に至るまで段階的な仕方で位置付けることができるのではないか、といったいくつかの着想は——空間と延長という論点を除けば——その後のベルクソンの思考の展開をある程度は素描してくれるものだと言える。

第2章「常識と形而上学」では、まず、自由行為を初期ベルクソンの二つの著作に一貫した主題であると捉える際に想定される反論への応答を行う。『物質と記憶』が冒頭で示している他行為可能性は、現に遂行されつつある未完了の行為における可能性であって、『試論』で自由意志と共に批判された完了相の下で捉えられた行為の間での選択ではない。前者はむしろ、『試論』で示された自由行為の最も低次の段階として理解されるべきものであり、『物質と記憶』が冒頭から始まる議論で問題としているのは、まずもってそうした自由の基盤がいかにして与えられるのか、その可能性の条件の探求なのである。他方、常識の身分については、二つの著作間でたしかに齟齬はある。しかしそれは、ベルクソンの思想の発展と見做される事柄である。というのも、それは『物質と記憶』において空間概念に対し、『試論』とは異なる考えが示されていることに由来するものだからである。そしてこのことは同時に、物質の問題について、常識の観点が出発点に据えられるひとつの理由となっている。というのも、『試論』と異なって『物質と記憶』においては、空間と延長の分離可能性が明確に主張されることによって、外的対象を直接知覚しているという常識的直観に一定の正当性が認められることになるか

らである。しかしこの点について『物質と記憶』が『試論』のように順序だった議論を構成していないのは、常識という観点が、我々が物質の問題に取り組むに当たってそれを採用せざるを得ない観点だからである。

第3章「自由行為の可能性の条件」では、常識の観点から、『物質と記憶』の実際の議論を自由行為の可能性の条件の探求として辿るという作業を行う。自由行為が可能であるためには、まずもって、複数の行為の選択肢が身体に対して提示されること、そしてそのようにして提示された選択肢の中からひとつが選択されることが必要であるが、これらは大枠で言えば、順に、知覚論と記憶論に相当する。そこでまず、前者を扱う『物質と記憶』第一章の議論のうち主要な論点をフォローし、行為の選択肢は、自由意志説が主張するような想像空間上ではなく、実際の知覚空間にすでに行為可能性という形で与えられていること、そしてそこから導かれる知覚の定義——身体の可能的行為と関係付けられた外的諸対象——の検討を通じて、『物質と記憶』における主要な概念・理論——情感・純粹知覚・収縮・記憶——がどのようにして要請されることになるのかを示す。続いて、記憶論を扱う『物質と記憶』第二章に目を移し、一般に記憶と呼ばれているものには習慣と出来事の二種があり、そのそれぞれが主導する二つの再認の形態が認められること、そしてそれらはそのまま行為の選択の二つの方式となっていることを確認し、そのうちのひとつである自動的再認およびそれによって可能となる運動図式の展開という論点について一定の理解を与える。

第4章では、まず、前章までの考察を下に、いくつかのテキストを横断的に検討することで、前著作から暗黙のうちに改変されていた時間および空間の概念に解釈を与える。知覚概念とともに導入される反射の働き——可能的行為の提示——は、テキストを厳密に解釈するのであれば、実際には知覚というよりも情感によって与えられるものであることを示した上で、この機能によって可能となる行為相関的な時間的距離を基礎として、身体を中心として広がる同心円上に「行動空間」が発生し、その空間を反省することで得られるのが『物質と記憶』における「等質的空間」であるという解釈を提示する。その上で、そのように改変された空間の次元を切り出すことによって得られるのが、「等質的時間」の原型であり、これに対応する実在的持続としての「私の現在」の「核」を成す部分において、「意識の流れ」が「行為の実現」として与えられることを示す。さらに、形而上学の水準に移行し、純粹記憶の存在は、想起される出来事が有するいくつかの特徴——場所をもたない、完了している、日付をもつ——を説明するために要請されるものであること、記憶が残存しないとされるのは、行動空間が未来にしか開かれていないためであるという点を明確にする。そのような理解のもと、意識の諸平面の理

論と（前章で先送りにされていた）注意的再認を確認し、それらを用いて、先にはその「核」しか問題にしてなかった「私の現在」の概念を再検討する。これは『試論』では明示的ではなかった、持続そのものの構造の分析に相当する。

第5章では、自由行為の可能性の条件の第一区分である選択肢の提示という条件について、先送りしていた二つの形而上学的仮説——純粹知覚理論と収縮理論——を検討する。まず、開眼事例についての心理学講義の議論を参照することで、知覚と情感の分離可能性を示し、情感から切り離されているが収縮としての記憶力は前提としている知覚の水準——準・純粹知覚——を確保することで、続く議論の前提を明確にする。さらに、純粹知覚理論の文脈においてベルクソンは、常識の観点とは異なった仕方で、物質全体が意識的な質を有することの必然性を主張していることを示し、そうした全体からの「選別」こそが脳が果たしている役割であることを確認する。収縮としての記憶力については、『試論』と『物質と記憶』における質および量概念についての理解の対立という形で問いを立て、それを解消する過程で見出される第三の多様体の概念によって、我々人間の感覚質から物質的な質までの段階的な移行が可能となっているのだという解釈を提示する。その上で、以上の理解に基づき、『物質と記憶』の解釈上大きな争点となる三種の記憶力について整合的な理解を提示する。

最後に、結語として「行為の形而上学」についての展望を述べる。意識の諸平面の理論によって、ベルクソンは、生ないし生活に完全に適合した人間の類型を、そうでない「衝動の人」および「夢想家」と対比的に「行為の人」と呼び、そうした人物に「良識」を認めていた。そのような観点から改めて『試論』の記述を読み返すなら、そこで最も高次の自由行為の典型として引き合いに出されていた事例——モリエール『人間嫌い』におけるアルセストの憤慨等——は、全く社会生活に適合したものでないことが気づかれる。しかし、そうした行為は、生ないし生活という拘束から解放されているがゆえに、かえって優れて自由な行為と見做すことができる。そしてこのような次元を、再度『物質と記憶』に立ち返って見出そうとするならば、それは生ないし常識という観点を反省する形而上学という水準に他ならない。形而上学という語についてこうした理解をとるのであれば、初期ベルクソン哲学のうちには、『実践理性批判』で示された水準における、行為の形而上学の問題に通じる着想を見出すことができる。『試論』の第一章に示された「哀れみ」の感情についての理解とその背後に示唆される「力」の存在は、『道徳と宗教の二源泉』で詳細に検討されるものであり、したがって、自由行為という主題は、初期だけでなく最晩年まで一貫したベルクソン哲学のライトモチーフであるという見通しを得ることができる。

